

## 十二章 オルダス・ハックスリーとの出会い

一九五〇年代のなかばに、オルダス・ハックスリー(訳注1)が世に送り出した本の中に次の二冊がある。『知覚の扉』と『天国と地獄』である。そのいずれにおいても、彼は幻覚剤によってもたらされた陶酔状態を扱っている。そこには、著者自らがメスカリンを服用して体験した知覚と意識の変容が見事に描写されている。メスカリン体験によつて、ハックスリーは夢幻的な世界を体験し、物事を新しい光のもとで見出していた。見るものすべてが、日常のまなざしでは見出すことのできなかつたそのもの自身の永遠なる存在を開示していたのである。

訳注1 Aldous Huxley 一八九四～一九六三。イギリスの小説家であり評論家。T・H・ハックスリーの孫で第一次世界大戦後の知識人の懐疑を代弁する思想小説家として出発。次いで無執着による平和達成を首唱、一九四八年発表の『猿と本質』では第三次世界大戦後の世界を想定するなど、鋭い文明批評で活躍した。

この二冊には、幻想的体験の本質について、さらに文化史的にみた神話や宗教の成立、そして芸術

的・創造的な過程に伴うこのような世界把握の意義についての根源的な考察がみられる。ハックスリーは、幻覚剤に対して、次のような理由でその価値を認めようとしている。つまり、神秘主義者とか、聖人とか、あるいは大芸術家が自然の世界の中に、幻想的な眺めを自ら体験できるのに対して、そのような資質を持たない人間には、幻覚剤の作用によって、その異常な意識体験を可能ならしめることができるということである。さらに彼は、幻覚体験によって、宗教的あるいは神秘的な意味をより深く理解することができ、しかも偉大な芸術作品を生み出す母体となるべき新鮮なものを得ることができると考えているのである。この薬物は、彼にとって知覚の新しい扉を開けるための鍵であり、瞑想や孤絶や断食あるいは一種のヨガ修業のように、有効ではあるが辛さも伴うであろう精神的な「自動ドア」の化学的な鍵なのである。

私は当時すでに、この著名な作家の初期の作品を知っていた。ところで一九三二年に公刊された彼の空想科学小説『すばらしい新世界』の中で、人間に一種の多幸的気分をもたらすある種の心理的な薬が重要な役割を演じており、これを「ソマ」と名付けているのを知った。私は、すでに述べた彼の二冊の著作の中に、幻覚剤によってひきおこされた体験の重要な解釈を見出したが、そのおかげで私自身のLSD体験に対しても、より深い洞察を得ることができた。

そのような経過を経た一九六一年八月のある朝、実験室でオルダス・ハックスリーからの思いもかけない突然の電話を受けとり、私は驚き、かつ喜んだ。彼は夫人と一緒にチューリッヒへの旅行の途中であり、私と妻をホテル・ゾンネンベルクに昼食に招いてくれた。

黄色いフリージアの花を背広のボタン孔に刺し、背がすらっとして気品があり、しかも穏やかな物腰の紳士——この初めての出会いでのオルダス・ハックスリーの印象を、私はそのように記憶している。食事をしながら、主に魔法の薬について私たちは話し合った。ハックスリー本人だけでなく、彼の妻のローラ・ハックスリー・アルチェラもLSDとシロシビンの体験者であった。ハックスリーは、この二つの物質とメスカリンを「薬物」と呼ぶのを好まなかった。なぜなら英語の「drug」という語にも、ドイツ語の「Droge」という語にも、いかがわしいニュアンスが含まれており、さらに、この種の賦活剤は用語的に他の薬と明確に区別する必要があるからであった。夢幻的な体験を生ぜしめる動因は、人類の発展的頂点にある今日的状況では当然重要な意味を持つはずだと彼は信じていた。また彼は、実験室的条件下での実験にはあまり意味がないとされていた。つまり外界の印象に対して異常に敏感となるこの薬物効果に対して、環境こそが決定的な意味を持つことになるからである。ちょうどスイスにある家内の郷里の山について話題が移ったとき、彼は私の妻に、アルプスの草原の中でLSDを服用し、創造の神秘に触れるためにリンドウの花の青い萼の中を覗くようにと勧めた。

別れ際に、ハックスリーは出会いの記念として『幻覚体験』と題する彼の講演の録音テープをくれた。一週間前に、コペンハーゲンで開かれた国際応用心理学会の席上で行ったものであった。この講演の中で、彼は幻覚体験の意味と本質について述べ、そのために必要な補足として、この種の世界の把握と、現実世界での言語的・知性的把握との差異を対比させている。

その翌年、オルダス・ハックスリーの新刊で、しかも最後の作品となった小説『島』が出た。そこに

は、自然科学と技術文明の成果を東方の英知と融合させて、理性と神秘主義が調和した新しい文化を持つユートピアの島「パラ島」が巧みに描き出されていた。あるきの中から抽出された「モクシヤ剤」(モクシヤとは解放、救出を意味する)という魔術的な薬物が、パラ島の住民の生活に主要な役割を演じているのである。それを服用するのは、人生において決定的に重要な一時期にのみ限られる。パラ島の若者たちは、それを成人式の際に受け取るのである。またこの薬は、人生の危機の時期においても、精神的に最も近い人物から精神治療的な対話が行われた後に、その当人に手渡される。死の間際にある者に対してもこの薬が手渡され、それを服用することで彼はこの世の肉体を離れて、別の世界の存在へと旅立つことができるのである。チューリッヒでの対話の中で、私はすでにハックスリーから、新しい小説において再びサイケデリックな薬物の問題を扱うつもりだという彼の構想を聞いていた。そして彼は、この『島』の本に、「ヘモクシヤ剤」の発見者アルバート・ホッフマン博士へ——オルダス・ハックスリーより」という自筆のサインを添えて送ってくれたのである。

オルダス・ハックスリーが、幻想的な体験を発現させるこの幻覚剤に対して、いかに期待を寄せていたか、またこの薬物を用いることによって、どのような結果を生むことになるかについて彼の考えを、一九六二年二月二十九日に私に宛てた手紙の中から覗い知ることができよう。その中で、彼は次のように述べている。

……私はこのような仕事は幻覚体験の真の意味の自然史を発展させることになるだろうと大いに

期待していません。幻覚体験はもちろん人によって様々であり、それは体格や気質や職業の違いによって、また同時にその体験をどのように「利用できるか」としてのテクニック——自らの超自然的な体験から多くのものを引き出し、その「彼岸の世界」からもたらされた洞察を「現実世界」における人生でどれだけ役立てることができるとかというテクニック——の違いなどによって決定されるのです。（マイスター・エックハルトは、「瞑想によって得られた知恵は、恋愛の中で発揮されるべきだ」と書いています。）基本的に今後発展させていかななくてはならないことは、自己超越や宇宙との一体化の体験や、さらに幻覚体験によって獲得されたものを、愛や他の知的なものの中に、どのように具体的に発揮させるかというテクニックの問題だと思えます。（注1）……

注1 幻想的体験を、ある種の「自然科学」として確立しようとするこのような、あるいはそれに類した試みは、とりわけ身体的状況、気質そして職業などの違いによって、その引き出される内容がそれぞれ異なつたものであり、しかも同時に「応用神秘主義」のテクニックとして、そのテクニックは、先験的な体験から最大限の利益を引き出そうとすることである。さらに、この「別世界」から導き出された見識を、「この世」での処世術として、さらに役立たせることであると私は確信している。（マイスター・エックハルトはこのことについて、「瞑想によってもたらされたものは、再び、愛の中に利用されねばならぬ」と述べている。）

要するに、われわれが今後さらに発展させなければならないことは、幻想の中で、自己を超えて宇宙と融合し、一体化となつて得た体験の中で理解したものを、愛と知性によって、次々に伝えていく術なのである。

一九六三年の晩夏、私はストックホルムで開催された芸術と科学の世界協会（W A A S）の年次大会の会場で、しばしばオルダス・ハックスリーと行動を共にした。その協会の会議を活発化させ、形式的にも実質的にも意義深く進捗させるために、彼の提案や議論は大きく影響を及ぼしたのである。

W A A S創設の根底には、次のような願いがこめられていた。つまり一つの世界観や宗教に制約されることのない超国家的な委員会のもとで、責任ある専門家らによって、世界規模の問題を地球全体を包括する広い視野で処理し、責任ある政府や実行力のある組織が参考にできるように、その成果や提案そして意見を適切な形で公表しようとするものである。

一九六三年の会議に先立つW A A S委員の会合では、会議で人口急増の問題と地球上の天然資源および食料の危機の問題を扱うことが決定された。それに沿って行われた調査研究の概要と提案が、「人口危機と世界資源の利用」という題名のもとに、機関紙『W A A S』第二号にまとめられている。その一〇年前のW A A S会議では、テーマが産児制限、環境保護、エネルギー危機となっており、そこではこの世界的問題に注意を喚起し、全世界の権力者たちにその解決策を提案した。以後も、このような危機傾向は破局的に進行しており、そのための現実認識と願望と能力の間の悲劇的な矛盾が明らかとなってきたのである。

ストックホルムの会議で、オルダス・ハックスリーは「世界資源」というテーマの発展的および補足的項目として、次のような「人間資源」の問題を提起した。つまり、人間の中に潜在しながら、未だ開発されていない能力に関する調査研究に着手し、また解明していこうというものである。人類は、より

高度に発達した精神的能力、すなわち日常生活の意識レベルでは理解しがたい神秘に対する拡張された意識をもってすれば、この地球上における自分たちの生存について、生物学的および物質的な基盤をより一層認識し、理解できるはずである。したがって、あまりに合理主義に走りすぎた西欧人にとっては、ことばとか概念に置き換えることなく、現実を直接に感情的に体験する能力を発達させることがより発展的な意味を持つという主旨のものであった。

ハックスリーは、サイケデリックの薬物の使用も、人間をこのような方向に導く方法の一つであるとして、彼の議論を結んだ。会議に参加していた精神医学者ハンフリー・オスモンド博士は、サイケデリック（解き放たれた心）という術語を作り出した当人であるが、彼もまたこのサイケデリカ（訳注）サイケデリック現象による能力の開発の有意義な可能性について報告し、ハックスリーを支持したのである。ストックホルムでの会合が、オルダス・ハックスリーと私の最後の出会いとなった。そのときの彼の外見には、すでに重い病いの影が漂っていたが、精神的にはまったく昔のままの激しい情熱が感じられた。

同年の十一月二十二日、奇しくも彼のケネディ大統領が暗殺された当日、オルダス・ハックスリーはこの世を去った。ローラ・ハックスリー夫人がジュリアン・ハックスリーとジュリエット・ハックスリーに宛てた手紙の写しを、私は夫人から受け取った。そこには夫婦最後の日についての経過が、義兄と義姉に詳細に報告されていた。彼女はすでに、主治医からこの劇的な終りに臨む心の準備をするようにと言い渡されていた。というのも、オルダス・ハックスリーはすでに気管支ガンに冒されており、この

病の最後はおそらく激しい痙攣と窒息発作を伴うものであったからである。しかし彼は、次のような経過によって、安らかに息を引き取ったのである。

ハックスリーは、当日の午前中にすでに衰弱しきってしまい、話をするこゝとすらできない状態に陥っていた。彼は、そのような状態のなかで、一枚の紙片に次のように書いた。「LSD……筋肉……一〇〇ミリグラム……注射……」ハックスリー夫人はその意味するところを理解し、居合わせた医師がためらうのを無視して、自ら望んだ薬物を彼の腕に注射してやった。すなわち彼に、モクシヤ剤を注射したのであった。